

『闇の奥』と『地獄の黙示録』における人間の内面描写

Inner Description of Man in *Heart of Darkness* and *Apocalypse Now*

古賀元章 山本一夫

Motoaki KOGA

Kazuo YAMAMOTO

英語教育講座

北九州工業高専

(平成19年10月1日受理)

はじめに

ジョーゼフ・コンラッド (Joseph Conrad) の『闇の奥』(*Heart of Darkness*, 1899) は、彼自身が体験したアフリカ奥地の現実を踏えている。この現実描写から明らかになるのは、文明人が行く未開人への残忍さ、文明人から虐げられる未開人の悲惨さ、文明人が未開社会の中にほうり込まれて身の破滅へと向かう悲劇、である。したがって、この小説は、人間のこうした側面(残念さ、悲惨さ、悲劇)を読み取る作品だと言える。しかし、見逃してはならないのは、人間のあるがままの姿の一面を理解することであろう。そのことが、今日でもこの小説を味読する価値につながるからである。

本稿の前半では、人間本来の姿の一面を把握するために、この小説の作中人物たちの内面世界に焦点を当てることにする。

ところで、古今東西、戦争を題材として作られた映画は数限りないが、『闇の奥』を原作として、フランシス・フォード・ Coppola (Francis Ford Coppola) 監督が4年以上もの歳月と莫大な制作費を投じて完成させた『地獄の黙示録』(*Apocalypse Now*, 1979) は、他に類を見ない圧倒的な存在感を示している。

Coppola監督は、この映画を1979年度のカヌヌ映画祭に出展し、グランプリを獲得した後も、賛否両論の批評にさらされた。しかし、「熱狂している批評家とそうでない批評家がいる。これはいつものことだ。ただこの映画の場合いえることは、無関心な批評はひとつとしてなかったということである」(『地獄の黙示録』(パンフレット) 6) と彼は述べて、映画製作の出来栄に自信のほどを示している。

『地獄の黙示録』には、1980年に日本で上映された「オリジナル版」(上映時間153分)と、2001年に未公開のシーンを加えて再編集された「特別完全版」(上映時間202分)がある。そこで本稿の後半では、主要な登場人物たちの内面世界を論述の中心に据えながら、これら二つの映画と『闇の奥』の接点を検討したい。

1

『闇の奥』の冒頭は、海へ出航するためにテムズ河の潮時を待っている船上で、会社の重役、計理士、弁護士、「私」が、船乗りのマーロウ (Marlow) の体験談を聞くという場面である。その場面は同時に、われわれ読者も聞き手となることを意味する。“No one took the trouble to grunt even; and presently he [Marlow] said, very slow” (5)¹と語る「私」は、彼がこれから話す体験談を紹介するので、この小説の世界へわれわれを導く司会役となっている。

続くマーロウの話は、遠い昔(小説では1900年前)のローマ人がイギリスへ侵攻し、一人のローマ人の青年を次のように想像した内容である。

Or think of a decent young citizen in a toga — perhaps too much dice, you know — coming

out here in the train of some prefect, or tax-gatherer, or trader, even, to mend his fortunes. Land in a swamp, march through the woods, and in some inland post feel the savagery, the utter savagery, had closed round him — all that mysterious life of the wilderness that stirs in the forest, in the jungles, in the hearts of wild men. There's no initiation either into such mysteries. He has to live in the midst of the incomprehensible, which is also detestable. And it has a fascination, too, that goes to work upon him. The fascination of the abomination — you know. Imagine the growing regrets, the longing to escape, the powerless disgust, the surrender, the hate. (6)

これは、マーロウの単なる想像上の話として終わらないであろう。なぜなら、ローマ人のイギリスへの侵攻はマーロウのアフリカ体験の前兆であり、ローマ人の青年の姿はマーロウがこの体験で遭遇し興味を覚えたクルツ (Kurtz) の姿と重なるからである。したがって、上の引用文は、今から展開される彼の話を聞き入るための心構えをわれわれに求める内容である。

では、マーロウがアフリカでどのような体験をしたのかを考察してみよう。彼は、インド洋、太平洋、シナ海などからロンドンへ戻って来て再び乗船しようとしたが、その仕事口がなかなか見つからなかった。子供時代から地図が大好きであった彼は、ある商店で見た飾り窓のものに引きつけられた。それは、いつの日か行ってみたいと願っていたアフリカのコンゴ河の地図であった。そこで、彼はヨーロッパ大陸にいる親戚の叔母の骨折りで、この河を利用した貿易会社の船長になることができた。

このような描写には、コンラッドの船乗りとしての体験が反映されている。なかなか船の仕事がなかった彼は、ベルギーのブルッセルに在住する遠縁のマルグリート・ポラドフスカ (Marguerite Poradowska) 未亡人の尽力で、同国の「奥コンゴ貿易振興会社」(Société Anonyme pour le Commerce du Haut-Congo) の船長になっている (Baines 110)。彼は、1890年6月から同年12月までベルギー領コンゴに滞在し、コンゴ河へ航海している。彼の航海はインド洋やオーストラリアにまで及んでいる。海洋小説や航海記を読んでいた少年時代の彼は、アフリカ大陸へ行くのを憧れていた (*A Personal Record* 13)。したがって、マーロウの人物造形は、コンラッドの実際の体験に基づいているのである。

早速、仕事の契約をするために、マーロウはパリにある貿易会社を訪れる。ところが、彼の目に留まったのは、2人の受付の女性が黒い毛糸を編んでいる会社内部に漂う不気味さである。それが彼に、陰謀にでも引きずり込まれたように思わせる。その後、会社の書記と思われる男に案内された医者から、彼は身体検査を受ける。人間の頭蓋骨を測定する医者の薄笑いは、後述するマーロウの悲惨な体験を予兆させるブラックユーモアを感じさせる。このような雰囲気の場合は、われわれを作品の世界へ誘う要因となっている。

当時のイギリス社会の野外レジャーとして、観光旅行・博物館・展示品・品評会・定期市・見世物小屋・デパートがあった。これらの催し物は、人々の探検や冒険の疑似体験であった (武田 45)。この小説での貿易会社内の印象は、こうした疑似体験を当時の読者に期待させるような描写となっている。

2

さて、マーロウが乗ったフランス船は、寄港先で税関使と兵隊を上陸させるために、アフリカの沿岸を航行する。彼は船上から小船に乗った黒人たちを見る。彼らは大声で叫んだり、歌を歌ったり、体中から汗を流したりしていた。彼らの元気澁刺な活動を目撃したマーロウは、“I would feel I belonged still to a world of straightforward facts” (14) なのである。われわれは、まだ文明社会に住むという意識を持ちながら、彼の話を聞くことができる。しかし、マーロウの心の慰めは長く続かなかった。なぜなら、海岸や河の流れが死相を帯びるように感じられるからである。船は30日余り経って目標の河口に着き、別の船がマーロウ一行を最初の貿易支所へ運んだ。上陸した彼が強く印象を受けたのは、草むらに転がっているボイラー、ひっくり返ったトロッコ、動物の死骸のように捨てられていた車輪、壊れた機械類、錆びたレールの積み重ねなどであった。このような廃虚化した光景はわれわれに、文明社会の醜悪な側面を否応なく意識させる。

マーロウは、涼をとるつもりでさらに森の中に入ると、“the gloomy circle of some Inferno” (17) の世界を目にする。その世界が次のように示されている。

They [Black shapes] were dying slowly — it was very clear. They were not enemies, they were not criminals, they were nothing earthly now — nothing but black shadows of disease and starvation, lying confusedly in the greenish gloom. Brought from all the recesses of the coast in all the legality of time contracts, lost in uncongenial surroundings, fed on unfamiliar food, they sickened, became inefficient, and were then allowed to crawl away and rest. (17)

黒人たちが、年期契約という合法的な手段によって森の奥地から運び出されている。慣れない過重な仕事のために、病気になって死を待つだけの彼らの姿態は、未開社会がまさに生き地獄であることを伝えている。コンラッドは、Fisher Unwin 社に宛てた 1896 年 7 月 22 日付の手紙の中でコンゴ滞在について、“All the bitterness, of those days, all my puzzled wonder as to the meaning of all I saw — all my indignation at masquerading philanthropy — have been with me again, while I wrote.” (qtd. in Karl 379) と書いている。ベルギーのレオポルド 2 世 (Leopold II) は 1885 年に「コンゴ自由国」(E'tat indépendant du Congo) を築いて自ら王となり、文明開化の美名の下に、資源豊かなこの地域から象牙、鉍石などを搾取している。その担い手が、「奥コンゴ貿易振興会社」であった。この手紙で言及されている“my indignation at masquerading philanthropy”は、レオポルド 2 世の残忍なやり方に対してコンラッドが憤りを表明しているのである。そこで、彼のこの憤慨が上の場面に暗示されていると言える。

このように、われわれはマーロウの語りを聞くにつれて、文明社会から虐げられた未開社会の荒廃を強く意識させられる。それに呼応して、文明社会の残忍さも強く自覚させられる。既述した、探検や冒険の疑似体験への期待は、読者を完全に裏切るのである。それは、読者が心に抱いていた秩序ある既成の現実社会を根底から打ち砕くのである。したがって、われわれは、『闇の奥』が提示する作中人物たちの内面描写に注目せざるを得なくなる。

3

そこで、その後のマーロウの語りを追体験してみよう。彼は貿易会社の中央支所で、計理主任からクルツの存在を知る。計理主任によれば、クルツは他のすべての支所を合計した数よりも多くの象牙を同社の中央支所へ送り届けて、本社の幹部連中から目をかけられている人物だという。

マーロウは病魔に襲われたクルツに出会ったとき、“his [Kurtz's] sympathies were in the right place.... I learned that, most appropriately, the International Society for the Suppression of Savage Customs had entrusted him with the making of a report, for its future guidance.” (50) という印象を語る。この「国際蛮習防止協会」という名前が示すように、当初、彼は未開社会の文明開化に協力するという憐れみ深い理想主義に燃えた人物であった。しかし、野蛮人の生活に溶け込むうちに未開社会の魔力に取りつかれ、声量と雄弁によって原住民から神のように崇拜された。マーロウが『闇の奥』の冒頭で語った“Imagine the growing regrets, the longing to escape, the powerless disgust, the surrender, the hate.” という言葉が思い出される。この言葉に込められているローマ人の青年の心情は、次第に未開社会の生活に愛着を寄せ、ついに文明社会を嫌悪するクルツの心情を暗に伝えているであろう。その一方で、クルツは執念深く象牙を求めた。象牙を守るためには、相手への攻撃さえ行った。

後にマーロウは、“‘The horror! The horror!’” (71) と叫ぶクルツの末期の言葉を聞き取っている。われわれは彼の末期の言葉の意味をどのように解釈すればよいであろうか。この点を考えてみたい。

クルツは未開社会で原始人の本能のままの生活に引きつけられた。しかし、獲得した多くの象牙を貿易会社の中央支所へ送り届けることは、文明社会とのつながりを持つことである。彼は、未開社会の一員にすっかりなってきたわけではないし、また、文明社会を完全に断ち切っているわけでもない。両方の社会が彼の脳裏に植え付けられていたのである。そのことを証明している一例が、“My Intended, my ivory, my station, my river, my —” (49) とマーロウへ述べるクルツの言葉である。

マーロウはクルツに興味を示したが、次第に彼を理解して次のように語る。

No eloquence could have been so withering to one's belief in mankind as his final burst of sincerity.

He struggled with himself too. I saw it — I heard it. (68)

クルツは未開社会と文明社会の板挟みになり、苦しんでいたのである。内面に巣くう地獄の苦しみが、彼の胸奥からはき出されたのである。マーロウの語りは、そのことを肌で感じ取ったことを暗示している。そうすると、彼の末期の言葉から、マーロウは人間本来の弱さに気づいたと言える。

コンゴからパリへ帰って来たマーロウは、クルツが依頼した書類を届けるために許嫁を訪問する。これからの生活の拠り所とする彼の末期の言葉を女性から尋ねられたとき、“‘The last word he [Kurtz] pronounced was — your name’” (79) とマーロウは答えた。なぜ、彼はうそを許嫁に伝えたのであろうか。それは、本当のことを話せば、彼女がその後生きる力を失うことを察知していたからである。それはまた、彼が彼女も自分も含めた人間の脆弱性をわかっていたからでもある。したがって、マーロウがわれわれに語る狙いは、こうした人間の脆弱性を理解させることであったと言えよう。

コンラッドは友人のエドワード・ガーネット(Edward Garnett) に、“‘Before the Congo, I was just a mere animal.’” (qtd. in Sherry 63) と語っている。この言葉は、コンゴでの航海体験が今まで文明社会に安住していた彼に、人間本来の弱さの一面を教えてくれたことを示唆するであろう。

4

映画の『地獄の黙示録』において、原作の『闇の奥』の語り手マーロウ船長の役回りを演じるのは、アメリカ陸軍歩兵大隊の将校ウィラード (Willard) 大尉である。彼は、過去にアメリカ中央情報局 (CIA) の秘密工作員としてベトナムに潜入した経歴を持っている。任務を終えて一度は本国に戻るのだが、妻と一緒にいても安らぎを感じることができずに離婚し、新しい任務を求めてサイゴンの地に舞い戻っている。やがてアメリカ陸軍当局から彼に与えられた任務は、「カーツ (Kurtz) 大佐を暗殺せよ」ということであった。カーツ大佐は前途を嘱望された有能な将校であったが、軍の命令にことごとく背き、カンボジアの奥地に自らの王国を築いて原住民たちからはまるで神のように崇拜されている人物であった。ウィラードは思いがけない任務に戸惑いながらも、4人の乗組員と共に海軍の哨戒艇に乗り、カーツの君臨する王国をめざして奥へ奥へと河をさかのぼる。

原作には登場しないが、映画の中で注目に値する別の人物が、空挺部隊の指揮官キルゴア (Kilgore) 中佐であろう。彼の部隊は哨戒艇をヘリで吊り上げ、ベトコン(南ベトナム解放民族戦線)の勢力下にある地域を避け、ウィラードらを安全なナン河まで護送する役目を負っていた。ウィラードたちが到着したとき、彼の部隊はまさにベトコンの村への攻撃の最中であった。キルゴアは、誰が殺したかを顕示するために、ベトコンの死体の上にデス・カードと称するトランプを撒き散らしていく。また、サーフィンに対する異常なまでの執着が、彼のキャラクターに一層不気味さを加える効果をもたらしている。

ここで、キルゴアの特異なキャラクターの一端を紹介しよう。最初はウィラードたちに何の興味も示さなかったが、乗組員の1人のランス (Lance) が有名なプロのサーファーであることを知った途端、彼にだけは親愛の情を示す。また、哨戒艇の進入地点がサーフィンに適した大波が来る場所であることを知ると、すぐにヘリを使って一斉攻撃を仕掛ける。その攻撃では、ワグナー (Richard Wagner) の名曲『ワルキューレの騎行』(Der Ritt der Walkueren) がBGMとしてヘリに取り付けられたスピーカーから大音量で流される。さらに、ナパーム弾でベトコンの住む密林地帯を完全に焼き尽くしてしまった後、「俺は朝のナパームの匂いが大好きだ。それは勝利の香りだ」と豪語するのである。

「特別完全版」では、キルゴアの特異な人間性をもっとリアルに示すために、いくつかのシーンが追加されている。ベトコンの村を一斉攻撃するというシーンと、けがをした子供に対しては命を救おうとヘリで病院へ運ぶように部下に命じるというシーンからわかるように、彼には冷徹さと人間味が奇妙に同居していることが示されている。また、ナパーム弾による爆風でサーフィンに適した波が崩れてしまい、キルゴアはランスにサーフィンができなくなったことを謝る。引き留めるキルゴアを無視して、ウィラードたちはキルゴアの愛用のサーフボードをこっそり盗んで立ち去る。それを知って怒ったキルゴアはヘリで追いかけて来て、ジャングルの上空からスピーカーで怒鳴り散らす。キルゴアのこうしたブラックユーモア的「異常な」一連の行為が、戦場ではまるで「正常な」行為であるかのように映し出されているのである。

カーツの王国に到着するまでのウィラード一行の船旅にはさまざまな衝撃的事件が連続する。一行が給油

のために立ち寄った陸軍基地は、ロックコンサート会場のようにライトアップされ、プレイメイトたちの慰問を今か今かと待ちわびている。ヘリから降りて来た3人の彼女たちのショーが始まる。しかし、興奮した兵士たちがステージになだれ込んだので、ショーはたちまち中断され、彼女たちは再びヘリで立ち去ってしまう。「特別完全版」では、その後のプレイメイトたちのエピソードが追加されている。ウィラードたちは暴風で避難した救護所において、彼女たちを乗せたヘリを発見する。プレイメイトたちのマネージャーは燃料と引き換えに、彼女たちを兵士たちの慰安婦にしていたのである。先ほどまで慰問の舞台上でスポットライトを浴びながら華やかに踊っていた彼女たちが、原始的な物々交換の対象として扱われるという悲惨さが強く印象づけられる。

「オリジナル版」にはまったく無かったもう一つの新しいエピソードが「特別完全版」に付け加えられている。それは、ウィラードたちとフランス人一族が会うシーンである。哨戒艇は濃い霧の中をさかのぼり、朽ちかけた船着場に辿り着く。そこに現れたのは、植民地時代からこの地に住みつき、私兵を雇って自分たちの農園をベトコンの襲撃から守っているフランス人一族であった。彼らは70年前、祖父の代から入植し、何もなかった所に今の優雅で贅沢な世界を築いた。正装して贅沢な夕食をとっている彼らと軍服を着たウィラードたちとの異様な対照が描かれている。ここは到底ベトナムの戦場とは思えない雰囲気である。われわれ一族は自分たちのものであるこの土地や家族を守るために戦っているが、アメリカ人は歴史にも前例のない無意味な戦いをしている、と晩餐会の途中で家長のユベール・ド・マレ(Hubert du Marais)がウィラード一行に痛烈な非難の言葉を発する。

この場面では、ドマレー族とカーツのそれぞれの行動が似通っているのがわかる。ドマレー族が自分たちの土地で農園を営むように、カーツはアメリカ軍の指揮系統を逸脱して自ら王国を打ち立て君臨しているのである。晩餐の後、一夜を過ごすウィラードに向かって、未亡人のロクサンヌ(Roxanne)は「あなたの中に2人いる。神か獣か。いいえその両方よ」とささやく。この言葉は、彼が神と獣の両性を併せ持つカーツにこれから出会う前触れを暗示している。

カーツについての情報は、軍によるさまざまな資料や、彼が家族に送った手紙などから徐々に断片的に明らかにされている。その結果、彼が軍の命令に逆らって奥地に住みついた理由は、軍の偽善性、ひいてはベトナム戦争を強引に遂行するアメリカという国家の偽善性に対する反逆心から起こったのではないかと、ウィラードは思案する。また、カーツが崇高な精神と確固たる倫理観を備え、天才的な戦術の才能を持った稀有な軍人ではないかと、ウィラードは思うのである。その男をなぜ暗殺しなければならないのか戸惑いながら、彼はまるでカーツに魅入られているかのように奥へ奥へと遡航を進めていくのである。

5

ついに霧の向こうにカーツの王国が現れる。上陸したウィラードとシェフ(Chef)は、異様な装飾をした現地人たちに囲まれてあたりを歩き回り、木に吊り下げられた死体や切断された頭部が転がっている凄惨な光景を目にする。その後シェフはカーツに惨殺され、ウィラードは闇の中にあるコンテナ状の独房に監禁される。このとき、カーツ自身の言葉によって、彼が現在の境遇に至ったきっかけが明らかにされる。

カーツが特殊部隊で活動していた頃、村の子供たちのためにポリオの予防接種を施してやる。部隊へ帰還する彼らを老人が泣きながら追いかけて来る。村に引き帰すと、カーツは子供たちの切断された腕が山のように積み上げられているのを発見する。それはベトコンの兵士たちの仕業であった。カーツは、この状況を受け入れざるを得ない悲しみについて涙ながらに語るのである。

さらにカーツは、ウィラードの目の前で T. S. エリオット(Thomas Stearns Eliot)の「うつろな人々」(“The Hollow Men”, 1925)² という詩を朗読する。エリオットはこの詩の中で、剥製のワラ人形の描写を通して、人間たちが夢も希望もなく、破滅に向かって生きながらえているだけにしかすぎない現世を痛烈に風刺している。ワラ人形のように退廃的な現世に生きる人間たちとは対極にあるはずのカーツが、皮肉なことに王として君臨しながら、恐怖を払拭するために反逆する者たちを次々に殺害し、自らも精神に異常をきたして「狂気」の世界に住みついている。闇の中でささやくように語るカーツは、われわれに「狂気」の神といった雰囲気を感じさせるのである。

ところが、「特別完全版」ではこうした光景にもう一つ重要なシーンが追加されている。独房に差し込む明るい光の中で、天真爛漫な子供たちに囲まれたカーツが、幽閉されたウィラードの前に現れる。彼はウィ

ラードに向かって、『タイム』(Time) 誌のベトナム戦争に関する報道記事を朗読する。そこでは、「事態は好転している」や「光が見えた」といった具合に、現実とはまったく乖離した報道がさも真実であるかのように伝えられている。カーツはこうした虚偽の記事を非難する。この場面から、部隊への彼の背信的行為がまさにベトナム戦争の欺瞞やアメリカ国家の愚劣な行為に対する反逆心から起こったものであることに、われわれは気づくのである。「オリジナル版」で闇の中から登場し神と悪魔の両方を具有するような印象を終始与える不気味なカーツ像は、「特別完全版」で白日の下に登場し現実的な顔面を表出したカーツ像へと変容している。この変貌は、彼のリアルな姿を全面に映し出す役割を果たしているのである。

ウィラードによるカーツ殺害が、映画のクライマックスというべきシーンである。寺院では原始的なドラムの音に合わせて、生け贄のための水牛が引き出されて、祭と共にカーツ殺害は最高潮に達しようとする。もう1人の生き残ったランスはまるで原始人に退化したかのような容貌で子供たちと無邪気にじゃれ合っている。川面から現れ出るウィラードの顔は、ランスと同じように、原始人のように不気味な光沢を持ち、異様な雰囲気醸し出している。さらに、鉈を持ったウィラードがカーツの部屋へ静かに忍び寄るシーンが続いている。そして、カーツに向かって鉈を振り下ろすシーンと水牛が鉈によって切り裂かれるシーンとが交互に映し出される。ここでカーツは、原作のクルツのように、“The horror! The horror!” とつぶやきながら絶命する。ウィラードが鉈を投げ捨てて王国から去って行くことは、彼がカーツに代わって王となるのを拒否したことになる。また、民衆たちも武器を投げ捨てるが、これは統治者の不在と王国の崩壊を暗示している。「オリジナル版」ではそれに続いて王国が爆破され焼き尽くされていく無音の長いシーンがエンディングとして挿入されている。しかし「特別完全版」では、この最後のシーンはすべて削除され、鉈を捨てたウィラードが王国への空爆命令をするための軍の無線を切り、ランスと共に降り出した雨の中を哨戒艇で河を下って行くシーンで完結する。王国は爆破されずに残るが、統治者のいない今となっては、もはや意味のない存在と化している。雨はすべてを洗い流してくれるという意味では、物質の破壊の中から人間社会の再生の糸口を希求する Coppola 監督の気持ちがあがかわれよう。

この映画のタイトルに使われた“Apocalypse”は、新約聖書の最後の書「ヨハネの黙示録」を連想させる。この最後の書は、イエス・キリストへの信仰のために、ローマ帝国から激しい迫害を受けるキリスト教信者たちを勇気づけるために書かれたと言われており、「世界の終末」と「新しい世界の出現」から構成されている。また、この映画のタイトルにもう一つ使われている“Now”から読み取れるのは、言うまでもなくベトナム戦争を舞台にして人間のさまざまな実態を鋭く描くことであるが、人類が生み出した愚かな戦争が象徴する論理的な正当性の破綻、戦争という極限状態における人間のエゴイズムや善悪といった意識の問題、人間性の崩壊と再生へのヴィジョンなども忘れるべきではないであろう。

Coppola 監督は映画製作の意図を次のように述懐している。

「地獄の黙示録」製作において、わたしのなし遂げたかった最も重要なことは、観客にベトナム戦争の恐怖、狂気、感覚、道徳的ディレンマなどの認識を与え得るような映画体験を創造することであった。

4年以上も前、この映画の製作に関わり始めた当初、わたしはこの作品が、ベトナム戦争を扱った唯一のアメリカの劇映画、ということになると思い、そのつもりで仕事をしていた。わたしは、かの戦争の持つさまざまな面をできる限り描こうと努力した。そしてわたしは、それを更に掘り下げて、戦争という戦争の裏に潜む、道徳的問題にまで論を進めたかった。(『地獄の黙示録』(パンフレット) 1)

彼が求めた「戦争という戦争の裏に潜む、道徳的問題」の一端は、上述したように、映画のタイトルから読み取れる事柄であると指摘できよう。

おわりに

『闇の奥』の全編を通じて、マーロウは、自らの体験を穏やかに冷静に回顧しながら分析していく人物として描かれているばかりではなく、コンゴ奥地での文明人による非情な搾取の現状を目の当たりにして、時には痛烈な皮肉のこもった感情を吐露するという生身の人間の存在感を十分に持ち合わせた人物としても描かれている。クルツは、はじめは理想主義に燃え、現地人たちを西洋文化の下で啓蒙することを目指していたが、次第に象牙を漁る魔の商人へと変貌し、果ては自分のやり方に反抗する者たちを容赦なく抹殺すると

いう「狂気」の世界にまで陥ってしまう。本来あるべき人間性を失い、治癒の見込みのない病気にかかり、死が間近に迫っているのを悟ったとき、彼は“The horror! The horror!”とつぶやき命を絶つのである。この末期の言葉は、彼が畏敬の対象である神でもなければ、悪魔でもない、1人の文明人であろうとしながら、結局は狂気の世界に堕ちてしまった人間の内面に巣くう弱さの一面を示唆している。そのことを理解してわれわれに伝えるのがマーロウの語りである。

『地獄の黙示録』ではカーツも、クルツと同じように、理想に燃えた有能な人物として将来を嘱望されていながら、軍の抱えるさまざまな矛盾と戦争の無意味さや愚かさ気づいたとき、自らのモラルに従って行動することを正義として選択する。しかし皮肉なことに、彼が創造した世界は、絶対的な権力を濫用する恐るべき独裁者の「死の世界」であった。

コンラッドは、若き船乗りの時代、偶然に体験することとなったコンゴの未開社会での悲惨な体験を基に人間の本来の弱さを小説に書いた。コッポラ監督が描く戦争は、あくまでも人間の愚かさや人間社会の醜悪な側面を指摘するための一つの表現手段であるが、どこにでもいるような若者たち（たとえば、ウィラードやカーツ）を狂気の人間へ変えてしまう恐ろしさを秘めている。そこで、彼が目指したのは、人間社会の徹底的な破壊を探究する中から、求めるべき生き方の指針を見出すことであったように思われる。だからこそ、彼は『闇の奥』を読んでマーロウやクルツの言動に注目し、「人間そのもの」の存在を真正面から対峙して取り組んだと言えよう。

注

1. 『闇の奥』からの引用はすべて Robert Kimbrough 編の *Heart of Darkness* による。括弧内の数字は本書の頁を表す。
2. 「うつろな人々」には、土人がクルツの死を告げる言葉 “Mistah Kurtz — he dead.” (*Heart of Darkness* 71) がエピグラフとして付いている (81)。この詩の簡単な解説は、玉泉 59-62 を参照。

引用文献

- Baines, Jocelyn. *Joseph Conrad: A Critical Biography*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1960.
- Conrad, Joseph. *A Personal Record*. 1912. *The Mirror of the Sea and A Personal Record*. 1923. London: J. M. Dent and Sons, 1975. 1-138.
- . *Heart of Darkness*. 1963. Ed. Robert Kimbrough. New York: W. W. Norton, 1971. 3-79.
- Eliot, T. S. “The Hollow Men.” 1925. *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*. London: Faber and Faber, 1969. 81-86.
- Karl, Frederick, R. *Joseph Conrad: The Three Lives*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1979.
- Sherry, Norman. *Conrad and His World*. London: Thames and Hudson, 1972.
- 武田ちあき. 『コンラッド — 人と文学』. 東京：勉誠出版, 2005.
- 玉泉八洲男. 「うつろな人々」(解説). 『T. S. エリオット』(20世紀英米文学案内18). 平井正穂編. 東京：研究社, 1967. 59-62. 全24巻. 1967-71.
- 『地獄の黙示録』(パンフレット). (株)ヘラルドエース編. 東京：東宝(株), 1980, 1-32.

